

新連載 ▲第一回▼

田辺聖子

重森 守

△元朝日新聞神戸支局長▽

題字・望月美佐

人間模様

樂園

神戸・新聞地。

その歓楽街を北へ抜けたあたりに田辺聖子さん、つまり“おせいさん”的住まいがある。

皮膚科の診療所——あの「カモカのおっちゃん」が診察する診療所に寝起きし、モノを書いておられるのである。

「女の長風呂」シリーズにならって、こちらも「あーそびましょ」と訪れる。

六畳たらずの、ちっちやくて、かわいくて、ホノボノとしてる応接間。その部屋に現れたおせいさんは、部屋と同じようちいさくて、ホノボノと、あかるい。

(かわいい、などと申し上げては、天下の芥川賞作家におそれ多いので割愛するけど、ホントは実に、実にカワユイのだ)

それに去年の夏ごろにくらべたら、別人のように色つやもよろしい。頬が、バーッと輝いてもいる。

秋のはじめ、両耳とも外耳炎になつたらしい。こちらが、月も入院した。

それが、実に得難い休養になつたらしい。こちらが、「その節は、お祝いにも行きませんで……」

「ホンマ、ホンマ。あれは、お祝いもんやつたなあ」鈴をころがす(古い)ような、ビロードみたいな声

で明るく笑われた。

なんで、倒れはつたのか。

もちろん、過労。それしか、あれへん。

売れっ子作家だ。文句なしに五指に入るほどである。あのころは自称・月産五百枚に達していた。

主婦業兼務。夜は“おっちゃん”と毎晩のように酒をくみかわす。講演や対談だって割りこんでくる。二晩づきの徹夜も珍しくなかった。

「日本中の雑誌社や出版屋が、書いてもらいにコ一ペへ来るよ。それだけでも“快挙”や。あの人は、まあ、いうたらコ一ペの英雄やな」

地元の、あまり売れないモノ書きが、やつかみ三分の一ぐらいいの口調でつぶやいていたのもこのころだ。

が、ご当人は、それどころじやなかつたらしい。

真夏のある朝、訪れてみたら、徹夜あけとかで、例の伏目がちに、しみじみと洟らしてた。

「もう、取材に行くヒマもあれへんのヨ。ほんまに吐き出すばっかり。徹夜した翌朝なんか、私、いつたい、なんのためにこんなに働いてるんやろなアと、つくづく思うねン」

螢火のような声であつた。

「もう五十路に近うなると、イヤでたまらんようなこと

は、はじめからせえへんねン」

口調も、もとに戻っていた。病気をくぐりぬけて、いつそう自信や活力がおせいさんの五体にみなぎってきたらしい。

講演も対談も、たいていお断り。東京から電話で注文がきたら「おっちゃんと飲んでる方が楽しいから」なんてヌケヌケと答えることにしてる。相手はシラケて、あきらめざるを得ない。

が、書くことはメシより好き。目下、月産四百枚ぐらいには復活している。一回分が九十枚なんていう連載小説もある。この暮れは晦日まで執筆に追われた。

「東京の編集者がホテルで二日も待ちぼうけくわされてええかげんゲッソリした顔で最終の新幹線にとびのつて帰つていきよったわ」

うれしそうに語り、たのしげに笑う。

書いたものを読み、お顔を拝見しての限りでは、当た

りの柔かい、茶目つ氣たつぶりのお人柄。当代随一の人気作家といつても、決して高ぶらぬ。親しみやすい、根っからの庶民派なのである。

「私は、別に、後世に残るような芸術作を書こうとか、世のため、人のためみたいな、大作家にならとは思てエヘンねン。街の片すみで、自分の体質におうたもんを楽しみながら書く。それだけよ」

こうもいった。

「スポーツみたいに勝ち負けのはつきりするもんはキラいやねン。小説やつたら、どれが名作で、どれが駄作かわからんトコがいい。ちょっとと評判が悪うても、だれかがものすごほめたりすると、そーカなと思えてくるもんネ」

いわば、この世界での『勝利者』のことばだけに、いつそう実感がある。意外性のもつ真実というべきか。



でも、あのころは、何や、くらいい感じの陰気くさい人やいう印象が強かつたんやで、と中年の文化担当記者に聞いたことがある。

なにが、この文学少女?を変身させたのか。――受賞

後まもなくの結婚であるという人が多い。

ご主人、医学博士・川野純夫さん、ああ面倒くさい、つまり、かの有名なる『カモカのおっちゃん』である。

「ウマのあう人とのめぐりあいつて、人生最大のしあわせや思うねン」

当のおせいさんから、しばしば聞かされたコトバだ。

「つまり、組み合わせですねえ、男と女は、夫婦仲がうまくいかんちゅうのは、そら、最初が間違うとったん

や。どんな意げもんでも、惚れてたら一生懸命に尽くしますよ」

で、組み合わせがよくて、ウマがあつて、いうことなしのコンビは、飽きもせず毎晩サカズキをかわす。ときには新開地や三宮まで繰り出して、コリヤコリヤとやる。そして、歌もうたう。大正十三年生まれと、昭和三十年生まれの夫婦が、である。なんというシアワセ。

おふたりのレパートリー。
おせいさん』明治一代女、カスバの女、新妻鏡、瀬戸の花嫁(これはデュエット)：
カモカ』童謡、奄美(出身地)の民謡、人生の並木路、風、アケミという名で十八で：(挙げればキリがないのでヤメ)

「なんぼ縮切日が迫つとっても、酒のみはじめたら忘れてしまう。だんだん気が大きくなってきて、ま、あしたの朝、早う起きたらいわ、なんてネ」
三宮、といつても一流料亭やクラブへ行くわけではない。たいていは、小じんまりと、ちっちゃなスタンドばかり。そこが、うれしい。

そして肩を並べて飲み、うたう『酒友』も多い。多いけれども、おのずから顔ぶれが限られているみたいであ

る。厳然と『組み合わせ』を守っている。そういう感じ。

当方の推察によると――

おせいさんのキレイな人種とは、自己顯示欲のつよい人、ガツガツしてゐる人、權威と結びついている人(とくに文化人のくせに……)

いくら表むきは巧妙にとりつくろついても、たちまちその正体を見破り、自分との組み合わせカードの中に入れない――ような気がしてならない。

そういえば、いつだつたか、痛烈な三島由紀夫批判を聞いたことがある。「人間として好きになれないのよ。あの死に方みてもあざとくて、無理に背伸びしたようなところがねえ」

そうなのだ。

みなそれぞれに、分相応の生き方がある。自然に、気どらず飾らず、肩の力をぬいて歩く。そんな人種ばかりだつたら、どんなにか楽しいだろうな。

おせいさんの原作によるNHKの朝のドラマ『おはようさん』が好評だ。

週刊文春の『女の長風呂』シリーズ(いまの題は『あカモカのおっちゃん』)も固定ファンがぐんぐんふえている。なんといつても『エロチック・ユーモア』の分野で『女流』が初めて成功した意義は大きい。

「こつちはネ、ふつうの夫婦が夜、家で会話を交わすときの話題を提供しようと思って、また、教養小説のつもりで書いてるのに……」

いたずらっぽく笑つて

「よつばと私、エッチや思われるらしくて、東京の雑誌社からヘンな座談会の司会いうて来たりするんよ」

断つておくが、おせいさんは決してスケベエではない。横でカモカのおっちゃんがいかにヒワイな表現の性談をわめこうとも、いささかも同調しない。(少なくとも私は耳にしたことがない)

「エッチな人間があれを書いたら、あまり面白うならん

のと違うかな」

で、ご本人の口からワイ談を聞かせていただくのは、
残念ながらあきらめるところ。

夜もふけてきた。

「ここらでマジメな結論——。これから、どんなものを
書いていくおつもり?」

「私の一番すきなのは、長編で、長々しく、くだらない
日常を書いていくことなの。人生っていうのは、実際の
ところ、長々しくて、くだらなくて、句読点のないもん
やからねえ。それを毎日ちよびちよび書きづつしていく。
そんな大きな事件もないけど、全部読んでしまうと、底
の流れで起承転結ができると。そういう小説を書きた

いねえ」
では、また主人公がハイミスで、それに若者や中年男
がからんで……

「そうそう。中年男がええ場面で、カッコよく登場して
きて、ね」

若い男女は、あまりお好きじゃないみたい。青春のま
つたんなにあって、深い挫折の体験がないので、陰影
が乏しいから——。

「とにかく、私、中年男の魅力を、なんとか引き出して
やろうと一生懸命なのよ」

そいつはどうも。よろしくお願ひします。



動物園飼育日記—116—亀井一成

ないしょ話シリーズ(38)『オトコ腹、一家の老ザル



サル家族は、母子をかばうように、外になるほど下位のオスザル……というふうに、ひとたまりになつて夜をすごしている。しかも、眠る時も横になることがない。ゴリラやチンパンジーは巣を作り、仰向きに眠るが、サルたちはすべて立て膝、みんな抱きあい、あちこちにグループをつくっては息を殺すように“すわり寝”をしているのである。

そのサルたち、朝早く運動場への扉を開けてやると、ベネガオサルの赤ちゃんのように跳ね起き、争いながらエサ場めがけ一斉に走

ををしているのである。

り出る。

が、ふと、
私の眼に

とまつた
一頭のメ

スザル。
どうも近

頃、群か
らとり残

されるの
が目立つ
ようだ。

よく見
れば、こ

のメスザ
ル、サル



純白のうぶ毛をまとったベニガオサルの赤ちゃん

りをじつと見守り、かばいながら連れ出すのだった。夕暮れには、またサル舎に入れるが、一番あとになる老ザルが部屋に入るまでは、そわそわと家族みんなが落着かない。自分たちだけでは人ろうとせず、いったん入った若ザルみんなが、またぞろ外に走り出てくるのだ。

ある日、私はうかつにもこの老ザルを屋外に閉め出した。すると、どうだろう。エサには目もくれず、群の全員が異様な声をあげ、総攻撃をかけて来たのである。

厳しい自然界では、こうした自由に歩けない老体が生きのびることは難しいだろう。しかし、こうした動物園という檻の中、食物と安全とが保証された環境では、この老ザルのようなケースはよく起り得るのだ。しかし彼等はそうした“老人問題”を決して苦にはしていない。

それどころか老令にならうと、上下関係は依然守られ、この老女の威厳は相変わらず衰えを見せないのである。それは、身体的に衰えようが、精神的にはさほど老化していないためであろうか――。

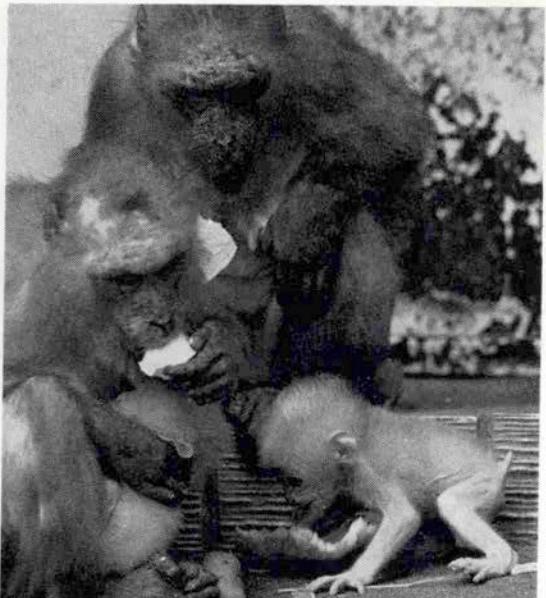
〔オトコ腹〕

この老ザルが次々産み落した子ザル五頭すべてがオスであったこと。その伴たちが現在の群を構成していること。つまり母子系群であったこともまた、老女の地位を守り続けたともいえ、もし一子でもメスであれば、成熟期を迎えた現在、かなり事情が違っていたとも考えられるのである。

やはり、時の流れは世代をどんどん変えて行く。二ホンザルよりひと回り大きくなり、ずんぐりした身体のベニガオザルの伴たちは、満五才で次々と性的に成熟期を迎え七〇才にあたる。寄る年波には勝てず、歯は抜け落ち、足腰は弱まり、何よりも気の毒なことは、老化が原因の両眼白内障で、視力がほとんどなくなつたことであつた。

朝夕、群の呼び声を頼るように壁づたいにヨロヨロと若ザルたちの後を追う姿は、まことに痛々しい。ところが、そのサルの家族たちは、その度にこの老ザルの足ど

くみな花嫁探しのお方ばかりだつた。



お嫁さんの「ユキ」「ユリ」に抱かれて育つ赤ん坊のベニガオザル。しかし、またしても男のコだった。
お母さんザルの暖い愛情に育くまれて群生活の中で子ザルも日に日に成長していく。

結局、二年がかり、業者の努力でようやく昨年の春、二頭のメス「ユキ」「ユリ」が外国船に揺られ、輸入されてきたのである。

〔ハネムーンベビー〕

花嫁たちがやって来たその日（昭和五〇年三月十四日）長男は他園に転出し、残った次男（十三才）を筆頭にオスザルたち、みな十才を迎える（人間に例えれば三〇才の男盛り）二頭の花嫁を見るやいなや、たちまち形相が変わってしまった。

一昼夜、格子を通しての群全部、つまり集団との見合いをさせた後、思いきって同居させたらどうだろう。やはりせつからずオス同士の激闘が始まった。しかも、よく観察してみると、二頭のメスを一番上位のオスが独占する様子。だが、黙っていないオスもあって、かなり複雑な交配が行なわれたことも事実であった。

また何よりも哀れだったのが、サル社会の厳しさといふが、同居の日から全員によるリンチを受け、毛は抜

け全身傷だらけ、なんとも厳しい“嫁いじめ”に私は腹立たしい思いの日々を過ごした。そうした折にも、老ザルだけは、不自由な眼で攻撃的な姿に対し、叱りつけ、夜にはメスたちをかばってやる態度が見られ、花嫁たちにとってたったひとつ救いとなっていた。

だが、花嫁ユキは昭和50年11月18日、そしてユリも11月28日、それぞれかわいい純白のうぶ毛をまとった赤ん坊をめでたく生んでからは、その老ザルの気づかいが少々おせつかいになってきた。若い嫁の抱く赤ん坊が刺激するのだろう。時折り母性本能をむき出し、つい油断していると先日起つたお隣りでのマンドリルばあさんの子さらい事件。それと全く同じ、このベニガオザルの老ザルがまた、若嫁と抱きあって座り寝の深夜、ふと母性が甦つたのである。ヨロヨロの老体でその初孫を抱きとつてしまつたのだ。仕方なく老ザルから赤ん坊をとりあげたとたん、私は落胆した。二頭の初孫がまたまた才スばかりだったからである。

こんにちは赤ちゃん



杉田裕美ちゃん / 神戸市東灘区

完全看護★冷暖房完備★病院前駐車可能

芦屋 柿沼産婦人科



芦屋市大木町1番18号
国道芦屋川電停東50米(明治生命南)
☎ 芦屋 (0797) 31-1234 代表

幼児歯科 小児歯科

SAMOTO PEDIATRIC DENTISTRY

佐本小児歯科

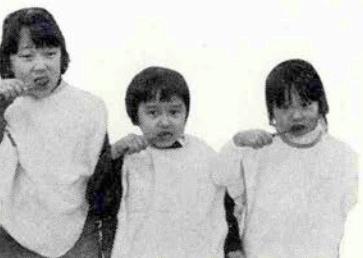
母親教室

(初診日) 火曜日 午前9時30分
金曜日 午後1時30分
(木曜日は休診)

そごう前センター街東角・さんちか入口
住友銀行三宮ビル6階
〒650 生田区加納町5丁目39
TEL (078)331-6302~3



神戸で初めての



子ども虫歯 予防センター誕生

いつも人通りでいっぱいの三宮センター側入口北側の「友信ビル」四階に、昨年十一月一日、日本で初めての「子どもムシ歯予防センター」が誕生した。

オープンして三ヶ月余りだが、口コミでこの予防センターのことを伝え聞いたお母さんたちが子どもたちを連れて関西各地から熱心に足を運んでくる。16坪ほどのカラフルな診療室はお母さんや子どもたちにぎやかな声でいつもいっぱいだ。

この「子どもムシ歯予防センター」の構想は、神戸で小児・幼児歯科を開業し、子どもたちの歯の治療にとりくんでいる佐本進さん（39）をはじめとする神戸臨床小児歯科研究会（会員約百人）が中心となってプランを練り、教育関係者、心理学者、社会学者、福祉関係者、医師、行政家そして一般の母親などに協力をよびかけ、何度も検討を重ねてやっと実現のはこびとなつたもの。

人間誰しも歯の痛いほど辛いことはないし、ムシ歯の治療で歯科医を訪れ、あのぎようぎようしい機械の前で死刑を執行される罪人のように極度に緊張したつらい経験をほとんど的人が味わっていることと思う。そしてこの恐るべき経験を現代の子どもたちのほとんどが、生後数年のうちに泣きながら何回となく味わうハメになつてるのはまさに現代の残酷物語といつてもよい。つまり日本の子どもはほぼ全員がムシ歯で苦しむというきわめ

て悲惨な状態におかれているわけである。

ちなみに少し数字をあげてみると、一才児の一割以上、二才児の約五割、三才児の九割弱、四才以降はもう九割以上がムシ歯をもつていて、生まれて三年もすると子どもたちの九割がムシ歯にかかっているのだから驚くほかはない。そして一人のものムシ歯の数は平均五本という。数字を見るだけで歯が痛くなりそうだが、子どもたちにとってさらに悲惨なのは、こういう子どもたちのムシ歯を治療してくれる歯医者さんがほとんどいないということだ。なぜ子どもの歯を治してくれる歯医者さんが少ないかというと、人手がかかり過ぎること（大人の三七四倍）、設備が大変なこと、経済的に引きあわないこと（大人の半分ぐらい）、時間がかかり面倒なこと等いろいろな理由があるようだが、泣いて暴れる子どもの治療は難しく、医療事故などの危険にもつながるため、たいていの歯医者さんは乳幼児の治療を敬遠してしまう。

さらに日本には専門医が少なく、現在四万人近い歯医者さんが日本にいるが子供専門の開業医はそのわずか〇・一%の四〇人にも充たない。ごくわずかの歯科医で数百万人にも及ぶ子どもたちのムシ歯の完全な治療などを到底不可能だし、毎年生まれてくる乳児のほとんどがムシ歯にかかるようになれば全歯科医が全力をあげて子どもたちだけにかかるても治療は全く不可能になつてくる

る。だからどうしても治療から予防へと対策を変えなければ子どもからムシ歯を追放することは不可能なことなのだ。

毎年三、〇〇〇人もの子どもたちのムシ歯の治療と取りくんできた佐本さんは、子どもたちのムシ歯を減らし、よりよい治療をするためにはどうしても予防センターの設立を痛感してきた。そして予防というものは単にフッ素を塗ったり、歯ブラシの使い方を教えたりするだけのものではなく、子どもと家庭とそれをとり明む社会のなかでの広い「予防」と「教育」が大切だと考える。

欧米諸国では子供たちのムシ歯は日本の子どもたちに比べるとずっと少ない。それは治療体制が確立されているからというだけでなく、親の子どもに対する教育やしつけが徹底して行なわれていることにもよる。子どもには甘いものを食べさせない、食後はかならず歯をみがく、といったしつけはかなり厳しい。いわば家庭や学校、社会全体に予防体制がキツチリでできあがっているのだ。

日本で初めての「子どもムシ歯予防センター」は次代にならう子どもたちのムシ歯を日本から追放し、予防ができる。

教育を社会のなかにひろめていくために、規模は小さいが大きな夢と悲願をこめて誕生した。

一日平均二〇名近くの子どもたちが母親に手をひかれ関西の各地方からやってくる。開設すると二ヵ月間で来院数は二九五人にものぼった。来院すると初診日にはまずカセットテレビやスライドでムシ歯に対する基礎知識を教え、口腔検査、歯ブラシ指導、フッソ塗布などをし、二日めに歯ブラシ指導第二回、個人指導、フッソ塗布などをして、だいたい二七三回の来院で予防のための指導と検査は終了する。一回の費用は二、〇〇〇円から二、五〇〇円。利用者は妊娠婦や六ヵ月から10才ぐらいの子どもたちが多い。

「子どもが何度もムシ歯にかかりましたので、このセンターがで大助かりです。感謝しています。これからはムシ歯にならないように定期検診にかならず来ます」というお母さんたちの表情は明かるい。

しかし開設して三ヵ月になるが予防センターの運営は非常に苦しい。有志が資金を持ち、広島・岡山・山陰、京阪神間の各地より20名を越える歯科医師が一ヵ月に一度ほど無料奉仕に駆けつけてくるが、毎月かなりの赤字が出るので関係者は頭が痛い。

「この予防センターはいろんな点から実験的な機能をもってるんですよ。私達が布石を投げかけたわけですが、将来は県や市にも予算をくんでもらい、よりよいものにしていきたいですね」と佐本さんはこの予防センターに大変な情熱をかけている。神戸市民の手で何とか立派なものに育てあげ、まず神戸にはムシ歯をもつた子どもは一人もいないという、ムシ歯追放のモデル都市にしたいものである。

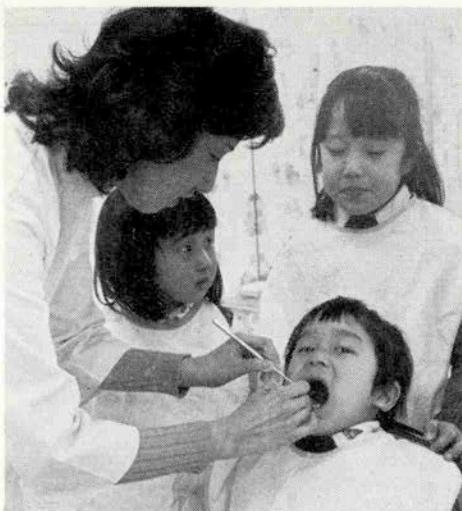
★子どもムシ歯予防センター

所在地 神戸市生田区加納町5丁目12-6 友信ビル4F

(三宮センター街東北角) TEL ○七八 三三三一—一四五八

診療時間 午前10時から午後4時まで。木曜・日曜・祝日はお休み。

初診は電話で受け付けています。診療時間は約二時間。一回の費用は約二千円程度。お気軽はどうぞ。





大人は決して子供にはなれない

井本ちづ子

△オールスタイル揃えるみグループ▽

毎日とても寒くて、朝、会社へ通う途中の公園に咲いている椿の花の赤が、周りの色が凍えついたように固いで鮮かに浮き上がって、とてもきれいです。そこで暖い小さい火が灯っているようで、ひっそりとがんばっている感じが、いいナアと思います。

公園を抜けた会社までの道にはレンガ造りのオフィスビルがあって、その界隈も神戸の街の中の最も好きな場所のうちの一つです。そこは時々CM用の撮影をしていたり、インド人がサリーをなびかせて歩いていくのも、よく似合う「絵になる」場所で、朝の一時間もの満員電車の後にもかかわらず、まだ頭にベールがかかつている様な時には、そこを歩く時、何處か外国旅行中の様な錯覚を時々する程です。

わたしはファンションが仕事だから、「良い服装とは、どういうものか」みたいな事を、よく考えるのですが、その必要条件の一つには、背景との調和が入ると思っています。回りの環境にまるで無頓着で、その持つ雰囲気をぶちこわすような服装は、それを着ている人まで、無神経で、周りを思いやる事の出来ない、余裕のない心の持ち主みたいに感じて、とても嫌です。

おしゃれは、ただ、自分自身の身につけているものの中だけでのコーディネートではなくて、生活や、環境や、その他、自分がかかわり合うもの全部とのコーディ

ネットだと思っているからです。

話は変わるけれど、わたしが一番最近読んだ本は、谷川俊太郎訳の「マザーゲースのうた」この本は、雑誌の中での紹介の中に入っていた「おんなのこって、なんができる」が気に入ったので買ったのですが、きっと、やさしい女の人が子供の為に書いたやさしい本だろう、というわたしの甘い期待を裏切って、ところどころ、認めたくない現実や、とても残酷な殺人が、さも平気そうに何気なく書かれているのにヨロツクします。

でも、平気で何気ない残ぎやく性っていうのは、子供の特性の一つだから、そういう意味でもマザーゲースって人は、子供に比較的、近いところにいた人だろうか、と勝手に納得しました。全部読み終わって、最も気になつたものを一つずつ紹介します。まず、最も気になつたのは

『そうできるんなら そうしたい
もしできないんなら どうできる?
できなきやできない できるかね?
きみもできなきや できぬはず
それともきみは できるのか?
できずにきみは できるのか?』

さし絵がとてもきいていて、10才位の頭の良さそうな男の子が皮肉っぽく笑つて、読む人を責めているみたいな眼つきです。「その通りです。『免なさい』と言いたくなります。それから、最も気に入ったのは、

『メリーはこひつじかつていた
しろいけがわはゆきのよう
メリーがいくとどこへでも
こひつじきまつてついてつた

あるひがつこうへおともした
こいつはきそくにはんしたが

こどもたちはおおよろこびさ
がつこうにこひつじがいるなんて

すぐにせんせいにおいだされたが
こひつじやつぱりそばでうろうろ

しんぼうづよくまつていた

メリーがすがたをみせるのを

どうしてこんなにメリ

ーがすきなの?

むちゅうになつてみん

なはきいた

だつてメリーがこひ

じすきだから

そういうものよとせん

せいこたえた



「子供が好きで……」東遊園地で筆者

広がりました。寛大になつたのが自分でも不思議な程で
す。

ところで、時々大人になりたがらないで、子供ぶる大

人がいるけれど、そういう人は少し気持が悪いですネ。

だって大人になつてしまつたのに、子供になろうとする
のはどうてい無理な話で、たとえば50年のファッシュ
ンテーマだったエスニックみたいだと思ひます。

ペルーや中国で昔から生活の中から自然発生したもの
のと、デザイナーが自分のファッショの為のアイディ
アとして借用したものとの違いは、表現されたシルエット

やディティールは同じ型をして
いても本質的には全く異質なもの

でしよう?

これは少し無理やりなたとえ
だつたけれど、要するに、大人

は決して子供にはなれないって
事が言いたい訳です。(ごくご

くたまに心が子供のままの人も
いる様ですが)

何故こんなに子供になれない
大人にこだわるかといえばわた

しもそうだからです。

とはいっても、仕事上の必要

からも、なるべく沢山、子供の
世界を理解したいので、近頃テレビも、観るのは「草原
の少女ローラ」や「フランダースの犬」。子供番組の中
では、もう終了してしまつたけどNHKの「長くつ下の
ピッピ」がとっても好きな私なのです。

わたしは、子供服のデザインをするのが仕事なのだから
子供に興味があるのは当然、といえば当然なのだけれどそれを離れて、とっても好きなのです。(あ、そういう

えば、好きだから子供服のデザインを始めたのでした)
以前は、それも可愛い子に限りで、その可愛い子供つていうのも、ワン・パンク的な男の子だけ、だったのが最近はその範囲が、女の子も、ボンヤリも、泣き虫も、と

行>からのランジェリーや、ナイティ、スリップなど11点が紹介された。

第2のリンゴはアダムとイヴのリンゴで、この場はゲストデザイナーの鶴居羊子さんの作品13点が紹介され夢のあるエスプリのきいた作品が楽しくロックに合せて上月倫子バレエ団と、今岡頌子モダンダンス研究所のお嬢さん達が踊りながら見せる。

第3のリンゴはパリスのリンゴで、女神ヘラは権力とゲルの好きなイヤミな美女。女神アプロデーテは、愛とロマンに満ちたボインの美女。女神アテナは、知性あるスポーティな美女。この三人にあわせてK.F.Sの会員がそれぞれの個性あるラウンジウェアを創作したりコーディネイトしたり。今岡頌子さん他8人のモデルが三人の女神に扮して登場“美しきものよこれをとれ”とリンゴのカゴをさしだせば、会場の男性諸氏が競ってテーブルにおかれたリンゴを女神に捧げて人気投票。どうして一番美しい女神が定まらぬところで松岡直樹さん扮するパリスが登場、リンゴを踊りながら愛の魅力に満ちた中西美代子さん扮するアプロデーテに捧げて、勝利者が決まるという構成。

この場の作品は、会員、市野木江光子、国中富樹子、藤本ハルミ、大西節子、本田貴容子、中島嘉子さんらが協力。

ショーの後は、ダンスとゲームで楽しい時間、メンバーの協力により集つた賞品で福引もあって華やかなファッショナブルなパーティだった。

今回の実行委員・協力者は小泉美喜子、阿曾吉生、松下みどり、若林雄三、渡辺三船、久利計一さんらに理事会役員。

★2月のマンスリーサロン

関学の田中国夫教授を迎えて



かねて田中国夫関学社会心理学教授をゲストにの念願が実現して1月14日県民会館902号室で、午後6時30分より“味と群れ”的テーマで、1時間30分にわたる講義をきいた。人間関係の構造は、感情とコミュニケーションと役割の三つから成り立つと、小野田さんや横井さんの話を組み込みユーモラスに展開、充実した魅力ある内容だった。会員スピーチは、藤本ハルミさんで、“パリで考えたこと”と題して、日本人の洋服づくりの姿勢について8年ぶりのパリの旅から考えたことを語った。
<左田中教授、右藤本さん>

★2月はコシノヒロコさんをゲストに

2月12日<木> 県民会館902号室

午後6:30より～9:00迄
6:30 会員スピーチ 浦野 敏彦
“空間とファッションの関り合い”
7:00～8:30 ゲストスピーチ
“クリエーターの生活”
コシノ ヒロコ（デザイナー）
8:30～9:00 会員懇親会
(会員以外の方は会費¥1,000です。)

★K.F.S.メンバーによるP.R.

室内を演出する

神戸装飾 株式会社

神戸市生田区中山手通2丁目64／4
三宮販売部 Phone (331) 0557

神戸もとまち

大丸

Phone 神戸 (078) 331-8121

ミセスのための婦人服

Vert ヴェール

伸和スタイル株式会社
神戸市葺合区生田町3丁目17
Phone (241) 8691

チョコレートの

モロゾフ株式会社

神戸市東灘区御影中町6丁目11番19号
Phone (851) 1594

コウベセンスで創る婦人靴
株式会社

TUKASA ツカサ

神戸市長田区細田町5丁目2／28
神戸化学センター5F Phone (691) 7739

株式会社 阿曾理容店

神戸営業所 神戸市葺合区浜辺通5ノ21
神戸商工貿易センタービル11F
Phone (251) 3010

株式会社 理容アソ

大阪市北区小松原27 富国生命ビル1F
Phone (331) 2214

オートクチュール

マーガレット

藤本ハルミ
神戸市生田区三宮町1丁目29
Phone (391) 1134

オートクチュール

アトリエ・ヨシコ

中島嘉子
トアロード・クロスピル Phone (321) 2268

★神戸ファッション市民大学OBによるグループ
 <神戸のファッション都市化をめざす>

K.F.S. news 5

事務局／神戸市生田区元町通2丁目37村田ビル
 デザインルームナカハラ内 TEL 391-4768

K.F.S クリスマスパーティに“三つのリンゴ”ショー



左は鴨居羊子さんの作品。左中は美藤商店のラウンジウェア。右中は中島嘉子さんの作品。右は市野木江充子さんのニット。

下の上段はジーンズの下に着る鴨居さんの作品。
 下の下段は、三つのリンゴのフィーナーレ。

12月10日午後6時より、生田神社会館4Fホールで1975年のフィナーレを飾るクリスマスパーティが開かれた。

中原武志 K.F.S 会長のあいさつにつづいて、神戸市の玉田経済局長が乾杯の音頭をとって、会員をはじめ160名のファッション業界のメンバーが集うパーティの幕があがった。

ミュージックは、神戸で人気のあるウッドハウス。司会はこれまた女性DJで泣く子も黙る小山乃里子さん。



今回、特に企画されたラウンジウェアショーは、H・ジュニアで本誌におなじみ哲学者細川董氏のギリシャ神话からアイデアを提供していただき、

“三つのリンゴ”をタイトルにロックのリズムが響き渡ってオープン。

第1のリンゴはニュートンのリンゴの話。この場は、神戸のランジェリーメーカーである川上KK<会員・戴本悦子>美藤商店<会員・大畠清美>ポンニーランジェリー<会員・平上素

花の親善文化使節が ブラジルへ



「いけばな」のデモンストレーション（写真はいずれも伊藤陽仁）

花手前を演じる吉田泰己団長

いけばな嵯峨御流神戸司所では、去る十一月十一日から二十日間、兵庫県と友好協力関係をすすめているブラジル・パラナ州へ花の親善文化使節を送り、ブラジル人のこころに日本の伝統芸術いけばなを印して帰国。

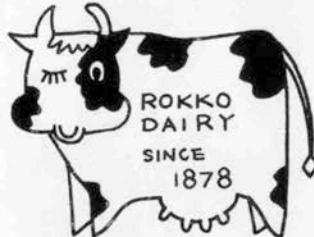
初の文化使節団は、吉田泰己団長以下八人、兵庫県・神戸市・神戸新聞社・サンパウロ新聞社などの後援で、坂井兵庫県知事と光田携え、初夏のサンパウロ市とバラナ州都クリチーバ市で、それぞれいけばなデモンストレーションを開催し好評を博した。

花を愛する情熱的なブラジル人のこころに、様式化した素朴ないけばなが、どこまで理解されるかが心配されたが、予想をはるかに上回る熱心な観賞者に囲まれ、質問責めにあう盛況。クリチーバでは州立高校講堂で前後二回にわたりて加藤領事が解説役をかつて出るなど。また県の駐在員田中雅樹さんは花材や会場のために、それぞれの温かい協力に支えられて親善の成果をあげることができた。

なお、一行の親善ぶりを記録した写真の一部を、県民サービスセンターに展示された。

フレッシュな味。 神戸生れの六甲牧場

★喫茶店・洋菓子店に！



牛乳
生クリーム
ケーキ用クリーム
コーヒー用クリーム
各種アイスクリーム
ソフトミックス

株式会社
六甲牧場

神戸市灘区篠原南町
6丁目1-25 〒657 (078)801-6000

★ご用命しだい営業マンが直ちにお伺いします。

お子様の幸福を願って…

三月ひな人形

名匠作逸品が豊富に
品揃いしております。



おもちゃの



カメヤ

三宮方面でのお買物は…

さんちか店 ファミリータウン ☎ 391-4045
三宮店 センターブラザ1階 ☎ 331-4969

元町方面でのお買物は…

元町店 元町通3丁目山側 ☎ 331-0090
パンプウ店 元町通1丁目不二家前 ☎ 391-0768

神戸駅前面でのお買物は…

サンこうべ店 神戸駅前地下街 ☎ 351-6002

世界最高の品質を
誇るアラガワの支店

いろいろなパーティーを
ご予算に応じてどうぞ



レストラン
砂時計

正午～夜9時まで

(年中無休)

生田区山本通1丁目35
東洋ハイツ1階

TEL 241-1857

今宵あなたと



安く飲めて、楽しく飲めて
今夜はゆっくりと
落ち着いた雰囲気で……
そう、プランタンで

スナック

プランタン

生田区東門筋
東門ヴィレッジ

TEL 321-2757